

[実践報告]

効果的なブレンディッドスクーリングを目指した 取り組みの結果

——「教育の方法と技術」での実践例——

田畑 忍*・守屋誠司*・魚崎祐子*・豊田 修**

要 約

筆者らは2017年度に実施した「教育の方法と技術」のブレンディッドスクーリングの試行結果をもとに、2018年度は「学修課題一覧表の提供」「学修状況の共有」「個別対応」等の対策を実施した。これにより、ブレンディッドスクーリングのメディア授業に慣れていない学生が、より効果的に学修を進めることのできる学修環境の構築を目指した。本論文では、これらの取り組みの結果について報告する。

キーワード：メディア授業，学修環境，ブレンディッドスクーリング

I. はじめに

玉川大学通信教育課程では2017年度、メディアを利用して行う授業（以下、メディア授業）と面接授業を組み合わせたブレンディッドスクーリングを「教育の方法と技術」の授業で試行した¹⁾。15回のブレンディッドスクーリングのうち、授業動画やテキストを利用して自宅で学修するメディア授業は7回分であり、対面で学修する面接授業は8回分である。試行した科目では、すべてを面接授業で実施する従来型のスクーリングよりも最終試験の結果が有意に高くなること、ブレンディッドスクーリングに関するアンケート調査からは多くの学生が好意的な回答をしていること等が確認できた²⁾。2017年度の試行結果をもとに、玉川大学通信教育課程では2018年度は新たにブレンディッドスクーリングを2科目追加し、2019年度の実施に向けてさらに2科目で授業動画の撮影や編集作業等を行っている（2019年1月現在）。

ブレンディッドスクーリングにおけるメディア授業のメリットに、学生が自身の理解度に応じて繰り返し授業動画を確認することができる点がある。実際、同じ授業動画を複数回視聴している学生が多くいる。また、必要に応じて授業動画を止めることができるので、教員が授業

所属：*教育学部教育学科

**教学部通大運営課

受理日 2019年2月15日

動画で説明している内容を書きとることもできる。メディア授業の視聴期間が約1ヶ月間あるため、自身の仕事等の状況に応じて学修計画を立てることもできる。また、ブレンディッドスクーリングにおける面接授業のメリットに、発展的な内容を集中的に学修できる点がある。授業設計により異なるが、筆者の一人が担当している「教育の方法と技術」のブレンディッドスクーリングでは、メディア授業で基礎的な内容を学修し、面接授業ではメディア授業の学修内容をベースに発展的なワークを多く実施する。8回という限られた時間で学修するため、学生の集中度も高い。また、従来型のスクーリングは3日または4日、6日間で実施されているが、ブレンディッドスクーリングの面接授業は2日間であるため、学生の宿泊費用等の負担も軽減される。

一方で、2017年度に試行したブレンディッドスクーリングでは、メディア授業終了間際にまとめて学修を進める学生がいたり、自身の学修計画に不安を感じたりする学生がいた。また、ブレンディッドスクーリングのアンケート調査からは、学修課題の一覧表が欲しかった等の要望も聞かれた。さらに、面接授業ではワークが駆け足で進んでしまったので、もう少し振り返る時間が欲しかった等の意見も聞かれた。ブレンディッドスクーリングにはメリットも多く、2017年度の試行では学修面の効果も確認できた。しかしながら、教育の質保証を実現するためには、学生にとってより学びやすい学修環境を構築する必要がある。

Ⅱ. 本研究の目的

筆者らは2017年度に実施した試行結果をもとに、より効果的なブレンディッドスクーリングを実施するための改善法をメディア授業と遠隔によるグループ学修で検討し、「効果的なブレンディッドスクーリングを目指して」として報告した³⁾。これにより、学生にとって、より学びやすい学修環境の構築を目指した。本研究では、それらの改善法を取り入れた、2018年度のブレンディッドスクーリングの結果について報告する。なお、本研究で対象とする科目は筆者の一人が担当する「教育の方法と技術」であり、2018年度は同一科目のブレンディッドスクーリングを7月と11月の2回実施した。これらの結果を確認することにより、検討した改善法が学生の学修にどのような影響を与えたのかを確認することを目的とする。

Ⅲ. 課題の改善法

2018年度に実施した改善法については、「Ⅱ. 本研究の目的」に挙げた論文で述べている。そこで、以下ではその要点を確認する。

1. 学修課題に対する不安を解消するための改善

筆者の一人が担当する「教育の方法と技術」のブレンディッドスクーリングにおけるメディア授業では、学修内容を説明している「授業動画」と、テキストのチェックやレポート作成等を指示している「授業動画視聴後の学修の説明動画」をセットで提供している。学修課題については、いずれの動画でも指示している。そのため、2017年度に実施したブレンディッドスクーリングのアンケート調査では、学修課題の一覧表があれば、最終確認等がしやすくなるという意見が聞かれた。そこで、2018年度より、図1に示す学修課題一覧表を提供することとした。なお、提供する学修課題一覧表には、各回の授業動画の視聴時間等も載せた。これを確認することにより、学生は学修内容の全体像を把握しやすくなると考えられる。それにより、学修計画も立てやすくなるのではないかと考えられる。

教育の方法と技術／教育の方法と技術(幼・小) メディア授業一覧		
	実施チェック	備考
第1回 学修ガイダンス		
1-1 授業動画：11分51秒		
1-1 授業動画（授業動画視聴後の学修の説明）：39秒		
1-2 授業動画：9分26秒		
1-2 授業動画（授業動画視聴後の学修の説明）：3分49秒		
●授業動画視聴後の学修（テキストチェック）		
●授業動画視聴後の学修（振り返りシートの記入）		
●授業動画視聴後の学修（レポート作成：「なぜ勉強しなければならないの」に対する回答の作成） ＊作成したものを1部プリントアウトして対面授業に持ってくる		
●授業動画視聴後の学修（名札の作成）		
第2回 インストラクショナルデザイン		
2-1 授業動画：15分57秒		
2-1 授業動画（授業動画視聴後の学修の説明）：36秒		
2-2 授業動画：9分15秒		
2-2 授業動画（授業動画視聴後の学修の説明）：38秒		
●授業動画視聴後の学修（テキストチェック）		
●授業動画視聴後の学修（振り返りシートの記入）		
第3回 グループ学習の基礎		
3-1 授業動画：19分51秒		
3-1 授業動画（授業動画視聴後の学修の説明）：11秒		
3-2 授業動画：24分31秒		
3-2 授業動画（授業動画視聴後の学修の説明）：16秒		
●授業動画視聴後の学修（テキストチェック）		
●授業動画視聴後の学修（振り返りシートの記入）		

図1 学修課題一覧表の例

2. 個別対応を行うための改善

2017年度の試行では、「メディア授業の視聴期間が始まっていたことに気付かなかった」という学生が数名いた。メディア授業の授業動画をまとめて視聴すると、学修内容の理解が不十分になったり、学修を終えるのが困難になったりする可能性がある。そこで、2018年度のブレンディッドスクーリングでは受講する学生に対して、メールアドレスの登録を強くお願いすることとした。これにより、進捗が遅い学生に対して教育サポートシステム⁴⁾(以下、システム)の「メッセージ」機能を利用して、個別に対応することができる。また、2017年度も一部実施したが、必要に応じて電話連絡による個別対応も行うこととした。

3. 学修状況に対する不安を解消するための改善

2017年度のメディア授業の学修状況を確認すると、メディア授業の学修期間をまんべんなく利用して授業動画を視聴する学生や学修期間の終了間際に学修を始める学生等さまざまであった。学生にメディア授業時の様子を聞くと、初めてのメディア授業であったため、自身の学修が順調であるのかを不安に感じたと答えた学生が数名いた。そこで、2018年度のブレンディッドスクーリングではシステムの「お知らせ」機能を利用して、学生の全体的な進捗状況を定期的に連絡することにした（図2）。これにより、学生はメディア授業の学修を進めている他の学生の学修状況を知ることができ、自身の学修計画を振り返るきっかけとなる。



図2 「お知らせ」機能を利用した共有の例

4. 質問と回答に関する改善

本学のシステムでは、学生が学修テーマ等に対して自由に書き込んだり、それに対して他の学生がコメントしたりすることができる「掲示板」機能がある。しかし、そこに学生が質問を書き込んだとしても、システムから教職員に通知されるようになっていない。そのため、2017年度の試行では、学生が掲示板に書き込んだ質問に気付かず、回答が遅くなることがあった。そこで2018年度は土日を除く毎日、システムの掲示板や学生が教職員に直接連絡できるメッセージをチェックし、できるだけ早く質問に回答することとした。また、質問された内容と回答を必要に応じて受講生全員が共有できるように、システムのお知らせ機能を利用することとした。なお、土日に書き込まれた質問については、回答が月曜日になる可能性があることを事前にルールとして学生に周知した。

5. グループ学修を円滑に実施するための改善

筆者の一人が担当するブレンディッドスクーリングでは、メディア授業と面接授業の間に、遠隔によるグループ学修を実施する。グループの人数は4、5名である。学修課題には、各回の授業動画を視聴後、学修内容の要点や疑問点、考えたこと等を振り返りシート（図3）に短くまとめる課題がある。グループ学修では、振り返りシートをシステムに投稿しお互いにコメントし合う。2017年度に実施したブレンディッドスクーリングのアンケート調査では、「グループ学修でメンバーに頂いたコメントは自身の学びになった」等の肯定的な意見が聞かれた。しかしながら、グループ学修の開始日は明示していたものの、振り返りシートの投稿期日を示していなかった。そのため、グループ学修が始まったにも関わらず、メディア授業の学修を終えていない学生が数名いた。そこで、2018年度のブレンディッドスクーリングでは、メディア授業の学修期限と振り返りシートの投稿期日を明示した。また、システムのお知らせ機能を利用し、必要に応じて学生全体に振り返りシートの投稿期日等を伝えることとした。

教育の方法と技術 振り返りシート 学籍番号[] 名前[]	
<p>【1回目】</p> <p>「教育の方法と技術」というと、技術的なことに注目しがちだが、教育の目的や内容と相互に結びついた上で日々の実践があるということを再確認した。いくら高い理想を持っていても、実践に反映できなければ、意味を成さない。また、方法に促されて目的を忘れてしまっても、本来の目的と離れた本末転倒の教育になってしまう。常に、目的・内容・方法を意識していることが大切だと感じた。</p>	<p>【2回目】</p> <p>授業設計の特徴は、明確な目標を設定し、授業そのものを客観的に評価することによって、授業の改善を期待することである。絶対的な評価基準を設定するのは教育の可能性を狭めるのではと考えていたが、漠然とした目標では評価がしづらいため、発展性がないと思うようになった。些細な目標設定であっても、それを元に学習者の観察を丁寧に行う動機づけになるなど、視点を広げる助けになると感じた。</p>
<p>【3回目】娘が通っている大学でも、私が在学していた頃（ ）と大学の授業が様変わりしていて（私立／国立の違いもあるのかもしれない）が、大変驚いている。シラバスはもちろん（当時は一般教養でも教授の研究テーマを聞くが、研究の</p>	<p>【4回目】より具体的になってくるにつれて、目標設定と評価の重要性が理解できるようになってきた。評価基準は絶対的なものではないにせよ、授業をより適切に行うためのものであることを理解した。しかし、知識偏重でなく、高次の目標設定</p>

図3 振り返りシートの例

Ⅳ. 2018年度の試行結果

以下では、2017年度に明らかになった課題を改善することを試みた、2018年度の「教育の方法と技術」のブレンディッドスクーリングの結果について確認する。

1. 受講者数について

筆者の一人が担当した「教育の方法と技術」の各回のブレンディッドスクーリングの受講者

表1 「教育の方法と技術」の各ブレンディッドスクーリングにおける受講者数等

	2017年度	2018年7月度	2018年11月度
定員	40	40	40
申込人数	62	66	35
受講許可人数	44	45	35
メディア授業受講者数	36	45	35
面接授業受講者数	31	43	34

数を示す（表1）。定員は面接授業のワークの関係から、各回とも40名としている。2017年度と2018年7月度で受講許可人数が定員より多いのは、スクーリングでは1割程度の辞退者が見込まれるためである。2018年11月度のブレンディッドスクーリングでは定員を満たさなかったが、他の2回では申込人数が定員を超えたため抽選で受講許可者を決定した。11月度に定員に達しなかったのは、夏期スクーリング（8月3日から8月23日の期間を3期にわけて実施するスクーリング）で同科目が2回実施されたことが影響していると考えられる。なお、2017年度では、メディア授業を受講する前に辞退した学生が8名いた。これは、ブレンディッドスクーリングの面接授業の日程と教員採用試験の日程が重なったためである。

2018年度は7月と11月のいずれにおいても、授業動画の視聴が進んでいない学生に対して、事務部より数回、システムのメッセージ機能と電話で個別対応を行った。このうち、メッセージでの対応は7月度が11名、11月度が13名であった。システムのメッセージ機能では、学生が内容を確認したか否かを把握できるようになっているが、7月は9名、11月は11名が事務部からのメッセージを確認した。確認をしなかった学生に対しては、繰り返しメッセージを送ったり、電話による対応を行ったりした。また、システムのお知らせ機能を利用して、7月は2回、11月は3回、全体的な学修の進捗状況を通知して共有した。

2017年度の試行では、メディア授業の学修を終えることができずに面接授業を受講しなかった学生が5名いた。これは、メディア授業受講者数の14%にあたる。一方、2018年度のブレンディッドスクーリングでは、メディア授業の学修を終えることができなかった学生は7月が2名（4%）、11月が1名（3%）と減少した。

2. 遠隔によるグループ学修について

「Ⅲ. 課題の改善法」の「5. グループ学修を円滑に実施するための改善」で述べたとおり、2017年度の試行では、グループ学修の期間になってもメディア授業の授業動画の視聴を終えていない学生が複数名いた。これは、グループのメンバーにとっても好ましい状況ではない。そこで、2018年度からは、メディア授業の学修期限と振り返りシートの投稿期日を明確に示

した。また、受講生の学修の進捗状況を確認し、必要に応じてシステムのお知らせ機能を利用して「振り返りシートの投稿期日」や「投稿が遅れることの問題点」等について全体に通知した。

その結果、2017年度はグループ学修の期間中に振り返りシートを投稿した学生がメディア授業受講者数の53%であったが、2018年7月度は4%、11月度は0%と減少した。

3. メディア授業について

学生にとってより学びやすい学修環境の構築を目指し、2018年度のブレンディッドスクーリングでは、「学修課題一覧表の提供」等を行った。これにより、メディア授業時の学修に関する不安や不満等の改善を目指した。これらの対策を、学生がどのように感じたのかを確認するため、ブレンディッドスクーリングのアンケート調査のうち、学修環境に関するアンケート調査の結果を確認する。質問は、問1「メディア授業でレポート等課題を作成するにあたり、十分な情報は提供されていましたか」、問2「メディア授業のプリント類は満足できましたか」、問3「教員への質問やガイダンス動画等の支援体制は満足できましたか」である。グラフ中に示している数値は%で、0%の部分については示していない。また、各問で選択肢が異なっていたため、本論文ではすべてを「はい」「ややはい」「ややいいえ」「いいえ」で統一した。

なお、2018年7月度の学生からの質問件数は16件、11月度は17件であった。この件数に、教職員の回答に対するお礼等は含まれていない。すべての質問に即日回答したが、教員が即答できない質問については、事務担当より回答する旨を学生に伝えた。その後、事務担当より対応策をシステムのお知らせ機能を利用して学生全体に通知し共有した。

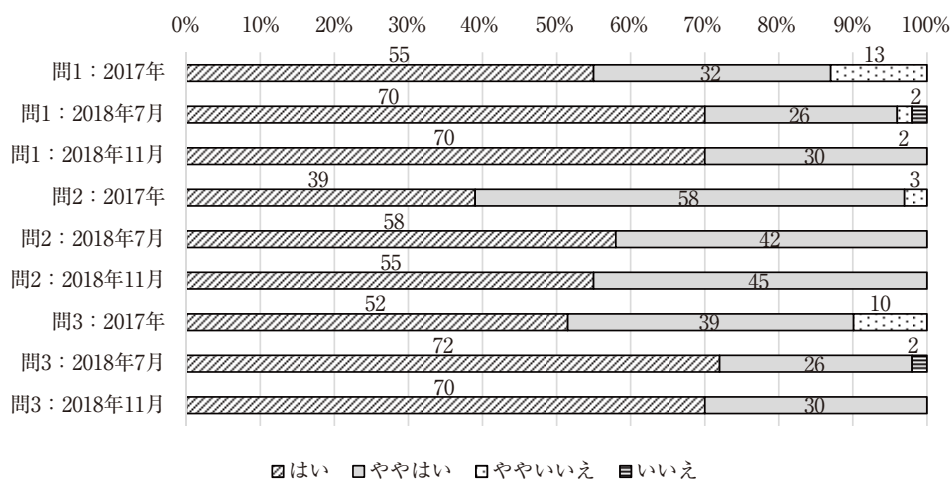


図4 学修環境に関するアンケート調査の結果

V. まとめ

2017年度に実施したブレンディッドスクーリングの結果をもとに、学生にとってより学びやすい学修環境の構築を目指し改善法を検討した。本研究では、その改善法を取り入れた2018年度の「教育の方法と技術」のブレンディッドスクーリングの結果を報告した。2017年度の試行においてもある程度、効果的な結果を得ていたことから、アンケート調査等の結果を2018年度の結果と比較しても、明らかな差を確認することはできなかった。しかしながら、「メディア授業の学修を終えて面接授業に進んだ学生数」や「振り返りシートの期日内の投稿数」、アンケートの結果等では、改善を行った2018年度の2回のブレンディッドスクーリングの結果の方が、2017年度のものよりも良い結果となった。また、2017年度のアンケート調査の自由記述欄には、メディア授業や遠隔によるグループ学修に関する要望が見られたが、2018年度は見られなかった。これらのことから、2018年度に「教育の方法と技術」のブレンディッドスクーリングで実施した改善についてはある程度、学生の学修環境の改善につながったのではないかと考えている。

今後は、遠隔による受講生同士の学び合いがより活発になるような場を提供したいと考えている。そのため、遠隔によるベア学修やアイスブレイクの導入、システムの掲示板機能の有効活用等を検討する。

参考文献

- 1) 田畑忍, 豊田修, 山外裕恵, 中里幸子, 平松裕二, 小島雅崇, 吾妻尚弥「通信教育課程におけるブレンディッドスクーリングの試行に向けて」, 玉川大学教師教育リサーチセンター年報第7号, pp. 119-125, 2017年
- 2) 田畑忍, 守屋誠司, 山口意友, 魚崎祐子「通信教育課程におけるブレンディッドスクーリングの試行結果」, コンピュータ&エデュケーションVol.43, pp. 30-35, 2017年
- 3) 田畑忍, 守屋誠司, 魚崎祐子, 豊田修「効果的なブレンディッドスクーリングを目指して」, 玉川大学教師教育リサーチセンター年報第8号, pp. 123-130, 2018年
- 4) GAKUEN EduTrack : <http://www.jast-gakuen.com/edu/?p=get> (2019年1月9日閲覧)

The Trial Result of Aiming for Effective Blended Schooling

Shinobu TABATA, Seiji MORIYA, Yuko UOSAKI, Osamu TOYODA

Abstract

We tried blended schooling in 2017. As a result of the trial, we found some problems. We examined the improvement method of the problems. We aimed at the construction of effective learning environment. In this paper, we report on the trial result of the blended schooling.

Keywords : media class, learning environment, blended schooling